講演会のご案内（立命館大学・細尾萌子）

授業をみるフランス的視点～日本の授業研究から抜け落ちているもの～

2024 年 1 月 20 日（土）立命館大学衣笠キャンパスの平井嘉一郎記念図書館カンファレンスルーム（右記マップの 1）https://www.ritsumei.ac.jp/file.jsp?id=227619&f=.pdf
〒603-8577　京都府京都市北区等持院北町 56-1
13：00～16：00　参加無料　誰でも参加可能　途中参加・途中抜け OK 対面のみ実施

〇登壇者

1）講演者：パリ第 8 大学教授の教育科学専攻のボネリー氏（Stéphane Bonnéry）
教育社会学者。日本語文献として、ステファン・ボネリー（小林純子訳）「学業困難は民主化政策にとって宿命か、それとも挑戦か？」園山大祐編著『教育の大衆化は何をもたらしたか』勁草書房、2016 年、pp. 201-215。ボネリー, ステファン（細尾萌子訳）「コンピテンシー・アプローチはフランスの学校の教育実践をどう変えたか」『フランス教育学会紀要』第 33 号、2021 年 9 月、pp. 22-31。関連する主著書は、Stéphane Bonnéry, Comprendre. L'échec scolaire. Élèves en difficultés et dispositifs pédagogiques, La dispute, 2007. 家庭環境が恵まれない子どもが多い教育優先地域の小学校 5 年生と中学校 1 年生の学級を 2 年間観察（フランスでは 6 歳入学の小学校が 5 年制、中学校が 4 年制）。このデータをもとに、教材の選択や教材の使い方といった日々の授業における教え方から学習困難が作り出されており、それが社会階層間の格差・不平等の拡大につながっているということを主張した本。
2）指定討論者：渡辺貴裕氏（東京学芸大学）
（教育方法学者。授業研究について多数の著作 https://researchmap.jp/nabetaka　渡辺貴裕・藤原由香里『なってみる学び　演劇的手法で変わる授業と学校』時事通信社、2020 年。渡辺貴裕『授業づくりの考え方　小学校の模擬授業とリフレクションで学ぶ』くろしお出版、2019 年など）。
3）通訳：白鳥義彦先生（神戸大学）

〇趣旨

日本では 1920 年代ころから、教師が互いの授業実践を互いに見合って分析し、教師としての専門的力量を高め合う授業研究がなされてきた。そこには外部講師として研究者がかかわることも多かった。こうした授業研究の成果は、公開授業研究会などによって外部に発信され、学外の教師の力量形成にも役立てられてきた 。

一方、フランスでは、教師の教育方法の自由の観点から、そもそも教師が互いの授業を見合うことは少なく、教師としての専門性は各自が個人的に高めるという伝統があった。

また、教育方法を扱うペダゴジーは学問として蔑視されてきた歴史もあり、教育実践を対象とした学術研究はあまりなされてこなかった。ただ、1970 年代からは、教師と研究者が協働して学校の具体的な機能を分析する研究が見られる 。

ボネリー氏は、日本発のレッスン・スタディを輸入するのではなく、フランスで伝統的に行われてきた社会学研究の蓄積に基づいて授業実践の研究を行っている、フランスではめずらしいタイプの研究者である。

ボネリー氏の問題意識や、その一環としてなぜ授業の研究を、とくに教材に焦点をあてて行っているのか、その研究からわかったことや今後の展望は何かを聞くことで、授業をみるフランス的視点に迫りたい。また、ボネリー氏は社会学者であるが、教育方法学を専門とする渡辺氏に指定討論をお願いする。これにより、社会学的な授業の見方と、教育方法学的な授業の見方の比較ができる。そこから、日本でよく行われている、教育方法学的な教育実践の研究から抜け落ちているものを探究したい。

〇プログラム

①趣旨説明 10 分

②ボネリー氏の発表 50 分：教材に焦点を当てた授業実践研究からみえるもの

・ボネリー氏の問題意識

・問題意識に関連して、なぜ授業実践の研究を、教材に焦点を当てて行っているのか。

・学校の教師とどのように関係性をもって研究を行っているのか

・フランスの社会学研究の歴史におけるボネリー氏の研究の位置づけは。

・ボネリー氏の授業実践研究からわかったことは

・授業実践研究に関する課題や今後の展望は

③渡辺氏の指定討論 20 分：授業をみる視点の日仏比較

・日本で行われている一般的な授業研究の主体や目的、手法、研究者の役割。

・演劇・ドラマの視点をふまえた渡辺氏の授業研究手法の特徴

・授業をみる視点が日本とフランスで、また教育方法学と社会学でいかに異なるか。

・フランス的・社会学的な授業をみる視点からすると、日本でよく行われている教育方法学的な授業研究から抜け落ちていると思うものは。

・ボネリー氏への質問（二つ程度）

④通訳（渡辺氏のつけたし部分の通訳）　5 分

～休憩 10 分～

⑤指定討論への回答　15 分

⑥全体討議（60 分）

⑦まとめ（10 分）

＊JSPS 科研費 19H01635 基盤研究（B）研究代表者：細尾萌子「フランスの論述型大学入試で問われる思考力・判断力・表現力とその育成法の総合的研究」を一部使用する。